実父の長倉喜太郎（飫肥藩給人席、六十石）は藩会所の構成員（相談中）を長く務め、学館係主事・川除奉行・江戸藩邸本締などの要職を歴任して人望があった。また、喜太郎の兄弟には、幕末に家老を務めた平部嶠南の妻阿耶佐がいて、一家は平部嶠南とは公私ともに親しかった。

処平の実兄長倉訒は、幕末に藩の探索方として京都で活躍した人物で、弟長倉雄平も教育者として活躍している。三兄弟はみな優秀で才気にあふれていたが、中でも処平は気概があったという。西南戦争では処平に率いられた飫肥隊が各地を転戦しているが、飫肥の人達は「飫肥西郷」という呼称で処平の人物像を短く表現している。『西南記伝』によると、「その志が西郷隆盛・前原一誠と同じである」として諸氏が尊称したともいう。また、若山甲蔵（宮崎県立図書館長などを歴任）によると同郷の人々が称したのではなく、他所の人たちが呼んだ呼称であったともいう。いずれにしても藩内外を問わず人望があった人物である。

これだけの人物であるが、その人物像を記した史料は少なかった。（数少ない史料として「妻が語った小倉処平の逸話」を参照）特に少年期の処平について触れたものは少なく、わずかに『西南記伝』に次のような記述があるのみである。

「幼少期の処平は武技をたしなんだが、読書は好まなかったという。武術は、藩内一の槍の使い手である平部右金吾について槍術を学んだ。江戸に出て安井息軒に学んだときは、苦心努力して学問を身につけようと、夜中を過ぎるまで就寝しなかった。幾らもせず頭角を出すにいたった」

処平が息軒の三計塾に入門したのは慶応三年（一八六七）五月、二十二歳の時で、十六歳で藩校振徳堂において書記を務め、その後も主事・句読師を務めているので、三計塾に入門した時にはかなりの学識を修めていたものと思われる。また処平が平部右金吾から槍を学んだのは両者の経歴などから、処平が二十歳前後の事と推測される。それらを考慮すると、この幼年期の記述には不正確なところがあるようである。

処平の名が記録に現れるのは、十八歳で小野家（後に小倉）の婿養子となった文久三年（一八六三）からである。養父小野九十九（飫肥藩給人席）は長倉家とほぼ同格の家柄であったが、両家ともに上級藩士としては薄給であった。養父である九十九は実直に務め四十五石であった家禄を六十五石に回復している。その嫡子小野昇右衛門良弼は、同じ歳の稲津済（志摩介）と江戸に出て安井息軒の三計塾に学び、将来を嘱望されていたが、文久二（一八六二）年に江戸出府中、当時、流行していたコロリ（コレラ）によって二十九歳の若さで急死してしまった。そのため、小野家では妹の小野タメに長倉家から処平を婿養子として迎え、家を継がせたのである（処平とタメは同年齢であったと思われる）。なお、タメの母セキは小村寿太郎の四代前・小村善右衛門の妹であったので、処平と寿太郎は遠戚だったことになる。また、理由は不明であるが処平は結婚して間もなく、姓を小野から小倉に改めている。

すでに処平の才気は藩の要人たちにも認められていたのであろう、翌元治元年（一八六五）には藩命を帯びて京都に使いしており、飫肥に帰国すると藩校振徳堂で教鞭をとっている。処平が小村寿太郎を知ったのはこの頃であろうか。

『小村外交史』によると幕末には、「京都・大坂の間を奔走して国事に尽くし、同輩に推服された」とあるが、処平が何時だれと交流をもったか詳細は分からない。ただ、『六鄰荘日誌』によると長州征伐の情報を収集するため、慶応二年六月末から八月初旬にかけて小倉方面を探索している。米沢藩探索方の雲井龍雄が京都から兄に送った手紙（慶応三年二月二十三日付）によると、この頃、交友していた人物として飫肥藩の関所平（小倉処平の誤写か）・長倉徳介（徳助は処平の兄の長倉訒のこと）・山田一郎次・甲村休五の名を揚げている。処平は一旦帰藩したが、同年五月には（山城忠次郎

ら）と共に江戸に出て、安井息軒の三計塾に入門している。ただ入門期間は短く、翌年には藩命を受けて長崎へ向かい、英語教育の必要性を認識するのである。

2　長崎における小倉処平の働き

鳥羽伏見の戦いに勝利をおさめた新政府は、幕府の直轄地であった長崎を統治するため、公家の沢宣嘉を九州鎮撫総督に任命した。（明治元年一月二十五日）その頃、大坂から鶴崎（大分県）に移動していた処平は、飫肥藩の指示を受け沢が乗船する船に便乗して長崎に到着した。（二月十五日）沢は長崎裁判所（後の長崎県）総督となり、長崎取締には大村藩主大村純熙、総監参謀に井上門多（井上馨・長州）・佐々木三四郎（高行・土州）町田民部（薩摩）・大隈八太郎（大隈重信・佐賀）・楠本平之丞などが就任した（『長崎県史』）。処平は飫肥藩の長崎留守居役となり、長崎裁判所と折衝を進める過程で佐賀藩の大隈重信や香月経五郎らと親交を深めたようだ。

さて、政権が新政府に移行して、飫肥藩が憂慮したのが幕府領預所であった。飫肥藩は前年に、幕府から宮崎周辺にあった幕府領の統治を委任されていたのであるが、その際に飫肥藩が中心となって鹿児島藩と支藩の佐土原藩を排除しており、明治元年当時に飫肥藩・高鍋藩・延岡藩で宮崎周辺の幕府領を統治していたのである。今回、その統治権の行方が憂慮されていたのだが、閏四月には「長崎裁判所が九州の預所を管轄するが当分各藩に統治を委任する」との達しが出される。処平はこれらの折衝に従事していたようで六月には念を押すように処平直筆で、「預地については長崎裁判所と連絡を取り合うように（阿萬文書・宮崎県立図書館所蔵）」と書面で伝えている。おそらく預地を幕府から委任される際に担当した飫肥藩士・阿萬豊蔵に宛てたものであろう。

3　貢進生制度と小倉処平（小村寿太郎侯を世に送りだした貢進生制度）

飫肥藩では、藩校振徳堂を優秀な成績で卒業すると、江戸の安井息軒に入門するのが常であった。明治元年（一八六八）、飫肥藩の長崎留守居となった小倉処平は、佐賀藩の英語学校の存在を知り、これからは英語の習得が必要不可欠な時代になることを実感した。明治二年に帰藩すると、優秀な若者を長崎に遊学させようと、藩校担当の阿萬豊蔵らを説得した。まだ十四歳の小村寿太郎も候補に挙げられたのは、『英文自叙伝』によると「洋学はなるべく子供の時から学ばねば上達の域に達しがたいという理由からであったという」とある。一部には反対する者もあり、処平は寿太郎を小倉家の養子にしてでも英語を学ばせようと考えていた。幸い父小村寛も賛成し、藩も藩費による留学を承認した。

明治二年五月、処平に連れられて小村寿太郎が長崎に着いた時、教えを得ようとした英語教師フルベッキ（大隈重信に大きな影響を与えた人物）は東京に招聘されて長崎を去った後であった。数ヶ月長崎に滞在した後、処平は寿太郎を引率して東京に向かったが、長崎滞在中の寿太郎は外国人と直接会話することで英語を身につけ、後に大学南校に全国から集まった貢進生の中で、群を抜いた成績を修めることができた。これは、恩師小倉処平の先見性と、それに素直に従い努力を重ねた寿太郎によるところが、大であったと言えるだろう。

佐賀閥との交流が深かったためであろうか、東京に出た処平は大学南校（東京大学の前身）に入り寮長に抜擢されている。明治三年頃の大学南校の舎長には井上毅（三年九月に舎長。熊本出身・文部大臣）・小倉処平・九鬼隆一（帝国博物館初代総長・岡倉天心の後援者）・濱尾新（東大総長・貴族院議員・文部大臣）・出浦力雄（翻訳家）であった。また、在校生には処平の親友で、佐賀藩出身の香月経五郎（江藤新平の側近）がいた。

当時の大学は「大学（本校）」「大学南校」「大学東校」の三校を